

入選 高学年の部

## おばあちゃんとの十一年

東京都

墨田区立東吾嬬小学校五年

麻野 花紗

「はるちゃん、帰るよ。」

おばあちゃんがむかえに来た。保育園からの帰り道、いつもいつもおんぶをしてもらっていた。今思えば、あんなに小さくて丸く曲がったおばあちゃんの背中に私は重かっただろうな。でも、おんぶしてもらう帰り道とても楽しかった。

会うたびに大きくなっていく私におばあちゃんは、しわしわの温かい手で、ぼうしを作ってくれた。ぼうしの他にも、ズボンやワンピースをいっぱい作ってくれた。

三年生になったころ私は、時間の計算がまったく分かって困っていた。そんな時おばあちゃんが教えてくれた。そして、私は少しずつ分かるようになっていった。おばあちゃんの教え方はとてもおもしろかったから。

四年生になって、新しい学校へ転校した。慣れない学校からの帰り道、ふと気づくと通りに置かれたイスにどこかで見たような人がすわっていた。それはおばあちゃんだった。おばあちゃんは、私を見るとニコニコ笑ってくれた。私が一人で帰るのが心配だったから、学校か

ら帰るのをずうっと待っていたというのだ。私の心配な気もちをわかってくれたのかなって、うれしかった。

私はだんだん大きくなっていく。おばあちゃんはだんだんと年をとっていく。それでも、おばあちゃんは痛い足をがまんして私に会いに来てくれる、電車を30分、さらにバスを30分乗って。遠い遠い道のりをただ私のためだけに来てくれる。

おばあちゃんとの思い出は、どんどん増えていく。これからも、もっともっと増えていくだろう。

私は大きくなるとともに、願いができた。それはおばあちゃんがずうっと元気であってほしいということ。私はいつもそう願っている。

もしも、おばあちゃんがつえをつく日が来たら、私ごとなりでずうっと手をつないであげるからね。私はそう決めている。

おばあちゃんとの十一年は、私の宝物だ。これからは、私がおばあちゃんのお世話をするね。ずっといつしよにいるから、おばあちゃん、安心していいからね。